

第二三話 スタジオ夜話 (番外編)

サウンドドラマの制作⑭

☆はじめに

今回はサウンドドラマの聴かれ方そのⅣです。より具体的な問題を聴かれ方というスタンスからお話して行きます。

2回から3回にわたって聴かれ方を考えた収録時のマイクロフォンセッティングについてのアプローチです。前回同様スタジオ夜話的な切り口で具体的にお話して行きます。

「台詞の収録」音的空間設定を考える！！

シュチエーションとはその場面設定のことです。ドラマの内容的設定、具体的場面設定(シーン状況)などが考えられます。

サウンドドラマを創る上では内容的設定に加え演出上の設定を考慮した音的空間設定と云えばよいと思います。前にも何回かお話ししましたが音的空間表現では様々なものが今日可能になってきました。前号ではヘッドフォン聴取の可能性についてもふれました。こうした可能性を具体的に検討すると台詞収録ひとつとってもいくつかの方法が考えられます。簡単な選択肢からひとつずつ確かめて見ましょう。マイクロフォンアレンジの前に必要な作業です。

「始めは表現する音空間の理解！」

台詞の収録、登場人物一人を仮定して

登場人物の台詞を考える時一番重要なのが台詞の中心人物は誰なのか、という点で

ず設定された場面で誰と誰が会話するのか、その場面でどう音声を処理するかという問題です。まず場面設定を簡素化して理解するために、その場面では登場人物を仮に一人としましょう。一人の登場人物の設定ではおおよそ「独り言」モノローグ的なものが想定されます。(一人称のナレーションは独り言とは別と考えます。)一人芝居的な作品以外、一人でリアルな相手を想定しての台詞はあまり聞きません。考えられるものは、登場している人物の想像の中での台詞、あるいは記憶の中での台詞などとなります。つまり音空間上の設定では今進行しているドラマの実空間以外の設定が想像されます。

整理して基本的な音的空間設定を考えると、次の三要件を考えて設定することになります。

1. モノローグ的台詞 (A)
2. 記憶の中や想像上の台詞 (B)
3. 一人称のナレーション的台詞 (C) です。

一方この三要件を表現する音的表現空間には

1. モノラルセンター
2. ステレオでの定位感を持つ空間
3. サラウンド定位のある空間、の三つの基本空間設定です。加えて聴かれ方を十分に考慮するなら
4. バーチャルな頭外定位の空間なども考えられます。

台詞表現の基本ではその内容が聞き取れなくてはなりません。(原則)そこで理解し易くするため台詞を時系列に並べて台詞の音空間設定を考えてみましょう。

前述の台詞 A、台詞 B、台詞 C です。表

現空間は 1. 2. 3. 4 です。

「モノラルセンターは場面設定で中心？」 すべての音空間を利用して創る！！

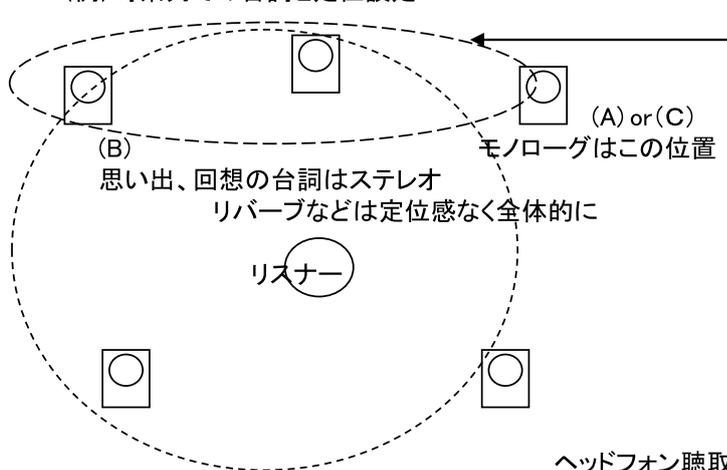
サラウンド、バーチャルな頭外定位を仮定した聴取環境でのモノラルセンター定位は聞き手の一番の要になる音?と云われています。話はほんの少しずれますが、サラウンド的な音 L・C・R の設定で、初期の映画の世界では登場人物の場面上の位置関係を表現しようとしたことがあります。しかしカットごとの設定や観客の視聴位置など様々な理由で作品を鑑賞しづらくその後今日でも台詞の基本位置設定はセンターに置き効果的に別の定位を利用するようになりました。しかしこれは映画という映像を伴う作品の視聴です。はたして音だけで表現するサウンドドラマの世界でも同様のことが云えるのでしょうか?筆者には疑問です。

確かにモノラルセンターは聴きやすいと筆者も感じます。慣れの問題?はいかがでしょうか、ラジオでは、音楽 CD では、その中心になるアナウンサーや歌手などは必ずセンターに定位しています。しかしそれはそういった創りを想定してのものなのです。サウンドドラマに於いて中心になる台詞は必ずしも場面センターに定位しなくとも良いのではと考えています。

(例) 時系列での台詞と定位設定

モノローグの台詞は絶えず右側から始まり聞こえる。ステレオ的音場定位の中で右

(例)時系列での台詞と定位設定



(例外)
カットアウト後のリアルな台詞

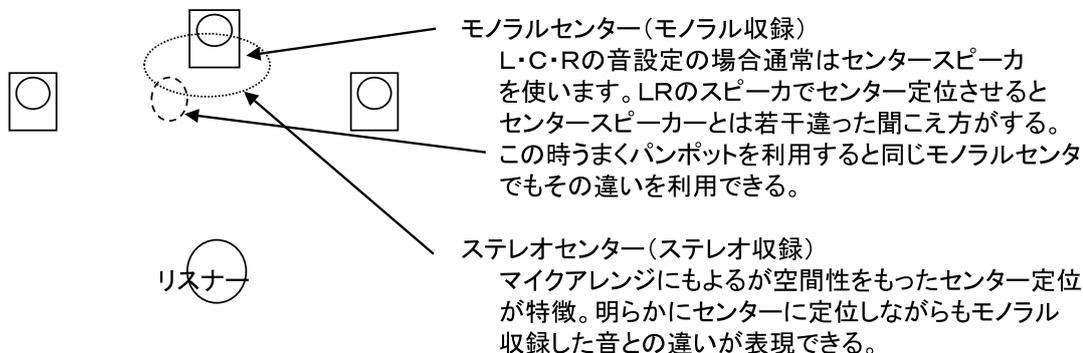
モノログ:モノラルで収録、近接効果

リアルな台詞:MS方式でステレオ収録
マイクから距離感を持って

回想での台詞:サラウンド的な配置のマイク
に対してマイクワークで収録

ヘッドフォン聴取を考えるならダミーヘッドマイクも併用

センター定位にも様々な定位の仕方があります。
聴かれ方を考えて場面設定(音的空間設定)を検討しましょう。



方向モノログ定位位置を避け全体的に思い出す登場人物の台詞が空間全体に入ってくる。

若干のリバーブが回想の台詞を効果的に、一連の音がすべてカットアウトされ、通常のステレオ空間でステレオマイクセッティングされた登場人物のリアルな台詞、「オーイ! 誰かいなか」など。モノログが右側から「そこにはだれもいなかった・・・」

良い例ではありません。しかしナレーションやモノログが決してセンター定位でなくとも表現は可能です。

「音空間の匠な構成」
ドラマの音空間は創られるもの!

基本的にサウンドドラマの世界ではすべての音設定は創られたものといっても過言ではありません。自然に聞こえる空間もそう聞こえるように創っているからです。台詞の収録も構成される音空間のなかでどのように使うか考えて収録しなくてはなりません。台詞オンリーの収録、考えられませんが確実に後処理もかなりのグレードで可能です。しかしスタッフの協力を得てあ

る程度の音や音楽なども加味して出来上がりを用意を想定しつつ作業することが重要です。

今回は、さらに具体的に台詞収録についてお話をしていきます。使用マイクロフォンやセッティング、と出演者のマイクロフォンワーク、移動するマイクセッティングなどもあわせてご紹介、収録テクニック的なお話も若干したいと思っています。

— 森田 雅行 —